

続ボラッチョ・ポニートのメキシコ便り(No.02)

「明日の鶏より、今日の卵」

・・・「今年こそは、今年こそは」への期待・・・

当地は、2000メートルを越える高地故の、まだ高度順化されきってないうえ、時差ぼけが昔ほどすぐに取りなくなった老体のせいも、どうもすっきりした寝覚め感が無い。着任したばかりで見聞きすることも少なく、頭はぼんやりしているし、なけなしの脳漿をふりしぼって、今回の便りに何を書こうかと考えていたら、突如前後の脈絡なしに、舌足らずの女の子と中年男性の奇妙なコンビの歌が口から出てきた。

「ポーニョ ポーニョ ポニョ さかなの子 青い海からやってきた ポーニョ ポーニョ ポニョ
ふくらんだ まんまるおなかの女の子」 (映画「崖の上のポニョ」の主題歌1番)

これから、はたとひざを叩いて思いついたのが、今回のタイトルに採用した、

「Más quiero huevos hoy, que mañana pollos」(マス キエロ ウエボス オイ ケ マニャーナ ポリオスと発音し、直訳的な意味は 明日の鶏肉よりは今日の卵が欲しいという諺で、日本語では、明日の百より今日の五十などと言うのだろうか。スペイン語の諺の方が具体的で分かりやすい)である。

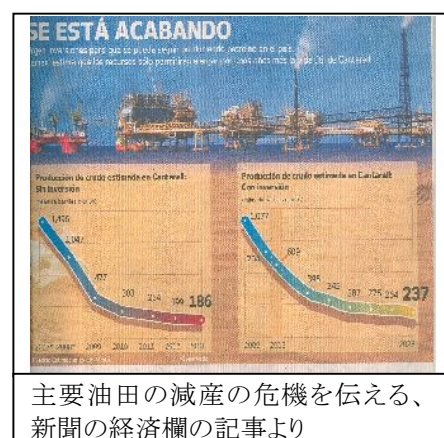
連想ゲームでもあるまいし、「まんまる」から卵(スペイン語でウエボ、以下同じ)、「ポーニョ」からポリョ(若鶏、鶏肉)、はては諺までとは余りにも安易な発想であると、お叱りを被りそうだ。それとも素晴らしい展開？

話を本来のものに戻そう。僅かの滞在期間の実感からメキシコに目を転じてみると、メキシコ通貨のペソは2年前に滞在していた時には、1ドル10ペソ前後で、今は13ペソ強まで下落し、外国人にとっては恩恵を受けそうだが、ボランティア生活の薄給の身では、前回の滞在時と比べても、格別恩恵を享受しているという実感は沸かない。

逆に持参したドルを生活費の為に、現地通貨と交換したとき、小額にもかかわらず、前回の滞在時には見たことも無かった500ペソ紙幣を、今回の初めて拝ませてもらったが、「あつと」いう間に足が生えているごとく消え去ってしまった。

昔は、お金のことを、「オアシ」などといったものだが、こんなこともインフレ進行の一つの証左と見なせるのかも知れないし、メキシコ人にとっては、当面の間辛く我慢を余儀なくさせられるのではなかろうか。

現政権も、麻薬対策と経済政策に懸命に取り組んでいるが、物価上昇や治安の悪化など、新聞の社会欄、経済欄に連日掲載されており、あまり良い話は聞こえてこない。さらに、追い討ちをかけたように、一つの問題が出てきた。



石油といえば中東方面ばかり注目されているが、メキシコは世界でも有数の原油産出国である。そのメキシコで頼みの綱の石油は、国の半分近くを生産し、世界でもベストテンの一つに入る、メキシコ湾上に展開する大規模油田カンタレルの枯渇で、増産したくても自然減に転じているという状況で、この動向はこの国の将

来にとっても大きな課題であろう。

こんなことを考えれば、タイトルのように将来の不確かなことの為に、目先の確かなことを放棄してはならないと現実的に考えてしまっても不思議ではない。

突然だが、メキシコからロシアの片田舎へ時空を超えて飛んでしまおう。その地で、俗悪な生活に押しつぶされそうになり、退屈のあまり惨めなわざを引き起こし、あるいはただ嘆いているだけのちっぽけな人々の姿を描いた、チャーホフの作品の、「ワーニャ伯父さん」の一節に、

「僕はもう四十七だ。かりに、六十まで生きるとすると、まだあと十三年ある。長いなあ！その十三年を、僕はどうか生きていけばいいんだ。どんなことをして、その日その日を埋めていったらいいんだ。

せめて、この余生を、今までと違ったやり口で、送れたらなあ。きれいに晴れわたった、しんとした朝、目がさめて、さあこれから新規蒔直しだ、過ぎたことは一切忘れた、煙みたいに消えてしまった、と思うことができたらなあ。」という一節がある(そうだ)。

インターネットに載っていた評論から借用したものだが、去年は、海外から帰国したばかりの虚脱感からなのか、たいした目標も見出せず、余りなすべき成果も無かったことを考えると、このぼやきは年齢を無視すると、ボラッチョ・ボニート氏と、残念ながら何となく重ねてしまう。

しかし、ワーニャ伯父さんのようにぼやいてもどうなるわけでもない。せめて年の最初くらいには、「夢」だけは持ちたいものと思っている。あるいは「希望」と言い換えても良いかと思い、サブタイトルを諺の意味と少し変えてみた。

当地メキシコには日本の5倍以上の広大な国土と、減産傾向に転じたとはいえ、資本と技術を投入すればまだ希望の持てる石油(上記写真の右側の傾向線)を含めた、資源大国であり、かつての重大な債務危機も乗り切ってきた底力もある。

経済学者の中では、将来は世界の5指に入る経済大国になるだろうと予想しているのもあった。個人的には、ボランティア活動をしながら彼らの未来性にかけて、「今年こそは、今年こそは」の中身を少しでも実現し、希望の持てる年にしたいものだ。

グローバルの観点からは、「チェンジ」を謳い文句にして当選した、世界一の巨大国の大統領に、それこそ世の中の、「チェンジ」を成し遂げてもらえることを期待したい。

メキシコも日本も結果的には、この巨大国に依存しなければならないのだから。

(2009年1月25日、ホテルの薄暗い照明の中で書いた)



前回の便りに引き続き牛の彫刻像、今年こそは、この牛のようにずっこけないように過ごしたいものである